

## 小学校音楽科と国語科の共通点に関する一考察 (3)

— 鑑賞曲と文学的な作品の教材研究に焦点をあてて —

西田 治 平瀬 正賢 (長崎大学教育学部)

### A Study on the Similarities between Elementary School Music and Japanese Language Courses (3) : Focusing on Studies of Teaching Materials for The Instrumental Works and Literary Works

Osamu NISHIDA, Masatake HIRASE

#### 1. 問いと目的

本研究は、小学校音楽科と国語科の共通点に関する一連の研究の三本目の論文となる。一本目の論文である西田・平瀬・山崎・山口(2019)においては、音楽科における鑑賞の活動と国語科における文学的な作品を読む活動の指導法の共通点を整理し、二本目の論文である西田・平瀬(2021)では、その指導法の共通点を現職の小学校教員の方々へ伝える講習内容の開発・実施と効果測定を行った。

講習会の効果測定として実施したアンケート調査において、音楽科と国語科の共通点を知ることによって、指導法の疑問や不安が解消されることが明らかとなった一方で、指導法の共通点だけではカバーできない部分があることも明らかとなった。

そのカバーできない点とは、教材研究にかかわる疑問・不安と時間不足の2点である。前者については、「鑑賞する題材の良さをどこまで教師が把握できているか(音楽科)」、「文章をどう解釈するのか、分析する人によって少しずつ違っていること。(国語科)」という意見に代表されるように、授業で扱う作品を教師自身がどこまで理解したらよいかという疑問・不安である。加えて、国語科では教師の解釈を教えることや作品の解釈を授業内でいかにまとめるかという指導法とかかわる疑問・不安も挙げられていた。後者の時間不足は、両教科共に教材研究に十分な時間が割けないこと、十分な授業時数がないことを指している。

これらの課題の改善に向けて、本稿では、対象となる作品を授業の文脈においていかに理解するかという教材研究の共通点について考察を進めることとした。また、両教科の教材研究における共通点を明らかにすることは、教材研究の効率化に寄与し時間不足解消への一翼も担えるのではないかと考えている。加えて、教材研究を行い、何をどこまで授業で扱うかを見定めることができれば、授業時数不足についても一部解消されるのではないかと考える。

以上を受けて、本稿では、音楽科および国語科における教材研究のポイントと方法の共通点とは何か、を研究の問いとして設定し考察を行う。両者の共通性を見いだせれば、前述した疑問・不安の改善だけでなく、全教科を担当する小学校教員の指導力の向上に寄与

するものと考ええる。

## 2. 先行研究の検討

音楽科と国語科の共通点に関しては、多数の先行研究が存在する。関向央奈(2017)は、中学校学習指導要領の国語科と音楽科に記載のある「批評」と「鑑賞」という用語の比較考察と小中学校の教科書比較を行い、合科的・関連的指導をいかに行うかについての展望を示唆しており、関向央奈(2018)では、「批評」「鑑賞」に加えて「語彙」を共通項とした指導内容の関連について考察を進めている。この他にも西田治・今道真名(2011)など、音楽科と国語科を関連させて指導する合科的、関連的指導に関する先行研究は数多く存在する。一方で、西田・平瀬ら(2019)で扱った指導法の共通点については、白石範孝ら(2018)が共通する用語(問いと答え、山場など)を視点として両教科の指導について具体的に考察しているもののみであり、本稿で扱う教材研究の共通点に関しては管見の限り先行研究は見当たらない。

## 3. 教材研究の観点と方法

以下、音楽科、国語科それぞれの教材研究の観点と方法を示し、その共通点について考察を進める。

### (1) 音楽科の場合

音楽科における教材研究の視点について、中地雅之(2020)は以下4点を挙げている(pp. 46-47)。

- 1) 楽曲の音楽的特徴・構成を捉える
- 2) 楽曲の背景を理解する
- 3) 表現の工夫の可能性を考える
- 4) 児童の実態から課題を検討する

3)については、表現領域に限った場合であるため、今回の研究範囲である鑑賞の活動では除外する視点となる。

1)については、曲想・歌詞の内容、リズム・速度や形式・反復など学習指導要領の「共通事項」において「音楽を形づくっている要素」として示され、具体については「指導計画の作成と内容の取扱い」(8)に示されている「音楽を特徴づけている要素」と「音楽の仕組み」について理解することが示されている。

2)については、楽曲の持つ文化的・芸術的・歴史的・地域的・教育的な価値を教師自身が認識することの必要性を指している。4)については、児童理解に基づいた教材研究の必要性について指摘されているが、この点については1)および2)の前提として必要な視点であるため、教材研究の具体的な視点としては1)および2)にまとめることができるだろう。

加えて、前文部科学省初等中等教育局教育課程課・調査官である津田正之(2017)は、今回の学習指導要領の改訂の特徴として「知識」をすべての領域や分野において明記した

ことをあげ、その知識としては、曲の名前や作曲家の名前なども重要であるが、感性を働かせて感じ取ることと結びついた知識が必要だとし、楽曲の雰囲気や表情と音楽の構造などと結びついた知識習得の重要性を示唆している（p.44）。

これを中地（2020）の示す視点と重ね合わせると、教材研究の視点としては、共通事項で示される音楽の構造などに重点が置かれるべきであることが理解される。また、音楽構造などが曲想といかにかかわっているかという感性と結びついた知識の必要性を鑑みると、音楽の構造などだけではなく、それらが楽曲の雰囲気や表情とどのように結びついているのかという曲想との関連について発想を膨らませておくことも必要となることが理解される。

では、曲想と音楽構造などの二者はどのように関連しているのか。高須一（2009）は、曲想は、楽曲の構造などから生まれるとし、楽曲の構造はある程度客観的に学ぶことができるものだとする（p.10）。また、寺田貴雄（2020）は、その曲を形づくっている諸要素やその曲に関連した知識・作曲家の逸話などは客観的に教えることができるとしながら、その曲の雰囲気や情景については聴き手の音楽経験や音楽観から影響を受けるため、子どもによって感じるイメージは異なり、クラス全員が一つのイメージに到達できるとは限らないとしている。つまり、曲想については、音楽構造などにその根拠をたずねることはできるが、一人ひとりの多様な感じ方が尊重されるべきものであることが理解される<sup>1</sup>。

### ○冒頭の疑問・不安への考察

これまでの記述を踏まえ、冒頭で紹介した疑問・不安についての見解を示す。

教材となる作品をどこまで理解するかについては、音楽の構造などのうち、授業で取り上げる要素・仕組みに焦点をあて理解すること、及びそれらが曲想といかにかかわっているかについて発想を膨らませることが主となる。音楽作品そのものの理解を深めようとするれば、それはきりが無い作業となる。故に肝要なのは、まずは授業で取り上げる要素や仕組みに焦点を絞る教材研究を行うことであり、素材研究と教材研究を分けて考えることである。

教材の解釈をいかにまとめるかについては、音楽科の曲想についてはクラス全員で統一の見解にまとめる必要は必ずしもない、といえる。重要なのは、個々人の感じ方を大切にすることと、なぜそう感じたのかの根拠を音楽の構造などから導きだして述べられることである。解釈をいかにまとめるかについては、音楽科で教えられることと教えられないことの区別を教師が理解していることも重要だと考える。この意味において、財団法人音楽鑑賞教育振興会鑑賞指導部会（2008）が示している3つの視点は非常に示唆に富む。

財団法人音楽鑑賞教育振興会鑑賞指導部会（2008）では、指導するという視点から音楽を見た場合、大きく分けて3つの側面があり、それは、①教えられない側面、②教えられないが育てられる側面、③教えられる側面であるとする。具体的には、①として「音楽の美しさ」や「感動」、②として「音楽を愛好する心情」など、③として客観的に捉えられること（音楽を形作っている要素と働きなど）があげられている。

音楽の美しさや感動が「教えられない側面」であると認識していれば、子どもたちが自

1 ただし、AとBという曲想の異なる部分がある場合、各自が感じ取る曲想に違いはあっても、その「変化」自体をクラス全員がとらえるという事は可能であろう。

由に感じ取る曲想の部分の多様性について見守ることができるが、「教えられない側面」であると認識していなければ、教師の作品解釈やイメージを押し付けることになりかねない。よって、この3つの側面を理解したうえで、「教えられる側面」に焦点をあてて教材研究することが望まれる。

### ○教材研究の方法

作品そのものから聞き取れたり感じ取れたりするものについて、教師自身が理解を深めるためには、聴き取る観点を定め、聴き深めていくことが必要となる。また、それが教材研究の方法と言える<sup>2</sup>。

#### (2) 国語科の場合

国語科における教材研究の観点と方法としては様々に想定できるところであるが、ここではまず、佐藤明宏(2012)が「オーソドックスな方法【基本編】」として挙げた項目の内、次の(1)～(6)により全体を概観し(pp.60-64)、分析の観点を挙げることにする。

- (1) 音読と聞き取り
- (2) 視写と書き込み
- (3) 意味調べ
- (4) 場面分け、欠損－解決のプロセス把握、意味段落・文章構成図
- (5) 主題・要旨の把握
- (6) 資料収集による教材研究
  - a 指導書
  - b 辞典・事典から
  - c 先行実践の文献目録から
  - d 作者・筆者自身の本

佐藤は「読むこと」の学習指導の対象となる文学的な文章と説明的な文章のどちらにもあてはまる方法を上のように整理している。それぞれの文章そのものを対象とする(1)～(5)と、文章に関わる資料収集による(6)からなる。このうち、(1)～(3)については多くの教師が取り組む自明の方法と見ることができよう。教材文を繰り返し音読したり、録音したものを繰り返し聞いたりして表現の細部に注意を払い、視写することで文体に目をやり、気付いたことを書き込み、気になった言葉や子どもがつまずきそうな言葉について意味調べを行う。とりわけ、登場人物の人物像や心情の把握に直結する言葉については、複数の小学生用辞書で意味を確認した上で文脈上の意味を確認する等、丁寧におさえておきたい。

(4)～(6)のうち、(6)については有効な視点ではあるが、ここでは教師自身の教材研究力を底上げする意味から、教師が教材文と直接向き合う(4)、(5)に焦点をあてることとする。なお、今回は文学的な文章を対象とするので、説明的な文章を対象とする(4)

2 教師自身、読譜ができるようであれば、鑑賞曲の楽譜を入手し、それを見ながら行えば、より効率的にかつ深く対象となる楽曲を理解することができるだろう。しかし、学級担任教諭が行う場合は、楽譜の入手までは難しいと考えるため、対象となる楽曲を聴き深めることを中心として行うのが現実的と考える。

の「意味段落・文章構成図」と(5)の「要旨」は省略する。

(4)の「場面分け」の「分け方」について、佐藤は「劇中の舞台のセットが変わるところと同じく、空間・時間の変化があったところ」としている。加えて登場人物も観点の一つに入るであろう。また、佐藤は「作品冒頭部分」で中心人物が持っている「何らかの問題（欠損）」が「誰かとの出会いと交流」を通して「結末部分では見事に解決」する、その「欠損－解決のプロセスの把握をしっかりとしておきたい」と述べている。物語では作品全体を通して、中心人物の何らかの変容が語られており、場面ごとのあらすじを捉え、どのように変容したか、変容が顕著に表れるクライマックスとともにおさえていくことが肝要である。さらに、クライマックスの変容に目を向けたとき、(5)の「主題」が浮かび上がってくることになる。

阿部昇（2015）や二瓶弘行（2021）らの指摘の通り、「国語の授業で子どもに学ばせ身につける力、つまり教科内容」は「極めて曖昧」（p.7）であり、新指導要領の指導事項においても「実際の授業レベルまでの具体化が図られていない」（p.20）と見ることができる。この点は、「共通事項」として、「要素」や「仕組み」の具体が指導事項に位置付けられた音楽科とは大きく異なる。多様な文学的文章を一律に分析できる観点を示すことは容易ではなく、新たに何らかの観点を指導事項に位置付けることの是非は別に吟味する必要があるが、結果として、文学作品の読みは教師個人の力量に任せられている部分が少なくない。指導者のこれまでの学びや読書経験を通して得られた読みの方法、参考となる解説書や指導書等の記述に委ねられている面があるといつてよかろう。このことは全教科を担当することの多い小学校教員にとって、大きな負担になっているとも見ることができよう。

そこで、先程の佐藤が言うところの(4)、(5)にあたる教材文の分析に焦点をあててみたい。「場面分け、欠損－解決のプロセス把握」とあるように、まずは〈時、場、人〉に着目しながら全体をいくつかの場面に分ける。武田博雄（2019）も指摘する通り、場面分けに「絶対の基準は存在」せず、「内容をわかりやすくとらえるための便宜的な方法」（p.18）ということをおさえておきたい。次に、あらすじを捉えることで中心人物の変容（＝「欠損－解決のプロセス」）に目を向けていく。変容が顕著に表れるクライマックスに向けて、どのように話が展開されているか、どこをおさえたらクライマックスの変容が深く読み取れるか考えていく。登場人物の人物像や心情の把握に直結する表現に目を向けることが肝要である。このクライマックスの変容を中心にして、そこから読者として何を受け取ったか考えると「主題」が立ち現れてくる<sup>3</sup>。文中の表現を根拠に考えることが求められる。

二瓶弘行（2021）では、「クライマックス場面」を「物語全体を通して、あること（多くは、中心人物の「心」）が、最も大きく変わるところ」（p.52）と定義した上で、「物語の『大きな三つの問い』」として、次の3点を挙げている（p.70）。

①最も大きくかわったことは、何か。

3 佐藤明宏（2012）では、「主題」を「文章全体として提示されている作者のものの見方・考え方」と定義しているが、本稿では、文中の表現を根拠に読者一人ひとりが受け取ったメッセージととらえておきたい。



②それは、どのように変わったか。

③それは、どうして変わったか。

二瓶は、物語全体を視野に収め、中心人物の変容に迫らせる観点を提示している。つまり、物語の冒頭からクライマックスに向けて読み解くことに加えて、クライマックスに着目し、そこに至る重要なできごとや表現を逆の方向からも読み深めていくということである。二瓶は、前述の「大きな三つの問い」に対して「自分の考えをもつ」には、「物語全体を深く読み返し、出来事の流れを的確に押さえつつ、言葉と言葉をつなげながら、人物の行動や心情、人物関係を読み取らなければならない」としている。授業のなかで物語と向き合う子どもと同様に、まずは教師も一人の読者として、表現を根拠に読み深め「大きな三つの問い」について自分なりの考えを見出しておく必要がある。このことは、授業時の子どもたちの読みや発言を正しく評価し、位置付けることにもつながっていく。さらに、授業を構想する際、全体を丁寧に扱えば果てしなく時間がかかるため、教材文の扱いに軽重をつけるということにもつながっていくと考えられる。

その際、着目すべき観点としては、物語の語り手を表す視点、象徴性のある表現や中心人物の名前を掲げた題名、比喩表現や繰り返し等の表現技法、話の展開や登場人物の心情を暗示する情景描写等が挙げられよう。これらを教材文の特性に応じて適宜組み合わせ、変容を浮き彫りにしていく。

以上のように「クライマックス場面」の変容について読み深めたとき、自分なりの「主題」が見えてくる。二瓶(2021)は、「教師の教材研究によって得られた『主題』を「唯一の正解」として、そこに到達させるために巧みに教師が誘導」というような「『正解到達主義の読解指導』が子どもたちから物語りを読む楽しさ、喜びを奪ったと言っても過言ではない」(pp.14-15)と述べている。平成10年版の国語科の指導事項から「主題」という文言は削除されたが、山元隆春(2020)の指摘の通り、「『主題』を問題にすることを『結果』とみなさず、『出発点』とみなしていきながら、それを追究する『過程』を重んじる限りにおいて、『主題』指導はいまだに文学作品の指導における重要な局面」(pp.96-97)である。教師の読みを「唯一の正解」として押しつけることなく、子どもたち一人ひとりが文中の表現に根拠を求め、自分なりの読みを創り上げて学級内で交流できるように教材研究を進めておきたい。

また、先程と同様に授業構想の面とあわせて考えると、作品の理解を通して子どもたちに何を学ばせたいか、その点に向けて焦点化をはかった教材研究が求められることにもなる。子どもの実態、教材の特性をふまえて、指導事項に重点を置いた教材研究が必要となってくる。その際、作品の理解に関わる「語彙」の扱いは各学年の〔知識及び技能〕に含まれており、「指導計画の作成と内容の取扱い」(3)に記載の通り〔思考力、判断力、表現力等〕に示す事項の指導を通して指導することが基本とされている。着目する語彙は、人物像の把握や「クライマックス場面」の変容に直結する言葉となるよう焦点化をはかることが肝要である。「語彙指導の改善・充実」は国語科の基礎・基本であり、新指導要領においても求められていることをおさえておきたい。以上のことは、基本的に全教科を担当する小学校教員にとって、限られた時間を有効に活用することにもつながっていく。

#### 4. 教材研究のポイント及び方法の共通点

音楽科における音楽作品、国語科における文学的な作品の教材研究のポイントと方法を整理すると以下ようになる。

##### 音楽科における教材研究のポイントと方法

- ア) 児童観、題材を踏まえた上で、「楽曲の音楽的特徴・構成」および「楽曲の背景」の2側面から行うが、小学校音楽科で重視すべきは前者である。
- イ) 「楽曲の音楽的特徴・構成」とは、音楽作品から聞き取れたり感じ取れたりする音楽の要素や仕組みなどのことである。この点については、深めていけばきりがないため、題材のねらいを鑑み、おさえておくべき要素・仕組みを焦点化し、教材研究の観点として設定する。
- ウ) 感性と結びついた知識の必要性から、要素と仕組みだけではなく、それらがどのように楽曲の雰囲気や表情と結びついているのかという曲想との関連について発想を膨らませておく。
- エ) 「教えられない側面」「教えられないが育てられる側面」「教えられる側面」の3つを区別し、「教えられる側面」に重点を置き教材研究を行う。音楽の美しさや感動といった教えられない部分を教師の主観で押し付けることがないように、この3つの区分について理解したうえで教材研究を行う。
- オ) 教材研究の方法は、観点（要素や仕組みと曲想との関連など）を定め、聴き深めていく。

##### 国語科における教材研究のポイントと方法

- カ) 児童観、教材の特性をふまえて、文章そのもの及び文章に関わる資料収集の2側面から行うが、まずは教師自身が文章そのものと向き合う前者に力を入れたい。
- キ) 全体を大きく捉えた上で中心人物の変容に注目し、変容が顕著に表れるクライマックスに向けて重要なできごとや表現をおさえる。その際、中心人物やクライマックスの変容に直結する語彙に着目して理解を深める。
- ク) クライマックスの変容を中心にして、文中の表現を根拠に読者として受け取ったものが自分なりの「主題」となる。教師の捉えた一つの読みに収斂する必要はない。
- ケ) 教材研究の方法は、観点（中心人物の変容、視点や描写、語彙など）を定め、読み深めていく。
- コ) 作品の理解を通して学ばせたいことに向けて、焦点化をはかった教材研究を行う。

以上を踏まえると、共通点は以下の4点に整理される。

##### ○共通点

- 1) 教材研究の方法は、観点をもって作品を分析すること（オ、ケ）。  
音楽：要素・仕組みと曲想との関連など、国語科：中心人物の変容、描写、語彙など
- 2) 作品を通して学ばせたい事項（題材や単元のねらいとして具体的に明示される内容）について焦点化し、それを観点として教材研究を行う（イ、コ）。

- 3) 作品そのものから聴き取れる, 読み取れることを重視する (ア, カ)。
- 4) 音楽作品における曲想の感じ方, 物語文における主題は, 教師のとらえたものを単一解とせず, 児童の多様なとらえ方を尊重する姿勢で教材研究を行う (エ, ク)。

音楽科における鑑賞の活動が, 音楽の要素や仕組みを根拠として曲想をとらえていくことを目指しているように, 国語科の物語文の読解では, 描写や語彙を根拠として中心人物の変容などから主題をとらえていくことを目指しており, この点が共通している。そのため, 教材研究においては, その根拠となる事柄について教師自身が理解を深めておく分析的な視点と, それらの総体として立ち現れる曲想や主題について教師なりのとらえ方を持つことが必要となる。ただし, 総体として立ち現れる曲想や主題については, 唯一絶対のとらえが存在するものではないため, 一つのとらえ方に固執するのではなく, 多様なとらえ方が存在すること, および授業場面においてもそれらを一つに収束する必要がないことについて踏まえておく必要がある。

#### ○相違点

国語科の場合は, 「ここにこんなふうに書いているから悲しい」というように感じたり考えたりしたことの根拠は本文中から抜き出すことになるが, 音楽の場合はリズムや音色など抽象度の高い概念を使って根拠を語らせていることがあげられる。

これは, 国語科では, 書かれた文章そのものを指し示しながら論拠を伝えることができるのに対し, 音楽科は耳から聞いたものを根拠として伝え合うため, 具体的にどの部分かを指し示しながら伝え合うことが難しいためであることが予測される。音楽科でも作品全体の楽譜を用いれば, 抽象度の高い概念を使用せずに, 楽譜を根拠として伝え合う活動が行えるかもしれないが, 小学校音楽科においては高い読譜力が必要となるため困難が伴う。よって, この点については, 相違点としてあげられる。

#### 5. 教材研究の実際

ここでは, 前章で明らかとなった4つの共通点を生かして, いかに関教材研究を行うかについて考察を進める。共通点の3), 4)は, 教材研究の前提や方向性を示すものであるため, 以下では, 1), 2)を踏まえ, いかに関教材研究のポイントを焦点化するか, および焦点化したポイントによって教材研究を行うとどうなるのか, について2教科それぞれ概要を示す。

##### (1) 音楽科の場合

ここでは事例として, 文部科学省国立教育政策研究所教育課程研究センター『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料【小学校・音楽】の中で紹介されている「事例2」を取り上げる (pp.65-72)。題材の概要は以下の通りである。下線は筆者によるもの。

○題材名: がっきのおとをたのしもう (第1学年)

「A表現・音楽づくり」「B鑑賞」



○題材の目標（態度に関する部分は割愛）

- (1) 打楽器の音の特徴や、曲想と打楽器の音色やリズムなどの特徴との関わり気付くとともに、即興的に音を選んだりつなげたりして表現する技能を身に付ける。
- (2) 打楽器の音色を生かした音遊びを通して音楽づくりの発想を得たり、様子を表す音楽の楽しさを見いだしながら曲全体を味わって聴いたりする。

○題材の評価規準（鑑賞の部分だけを抜粋し、態度に関する部分は割愛）

【知識・技能】曲想と打楽器の音色やリズムなどの特徴との関わりについて気付いている。

【思考・判断・表現】音色やリズムを聴き取り、それらの働きが生み出すよさや面白さ、美しさを感じ取りながら、聴き取ったことと感じ取ったこととの関わりについて考え、様子を表す曲の楽しさを見いだし、曲全体を味わって聴いている。

教材：シンコペーテッド・クロック

題材の目標および評価規準をみると、下線を引いたように打楽器の音色とリズムなどの特徴、曲想とのかかわりについて気づき、最終的に曲全体を味わってきくことが目指されていることが理解できる。

ここから教材研究の観点として、打楽器の音色、リズム、および全体を味わうために作品全体の構成（はじめ・なか・おわり、A-B-A）、および諸要素と曲想のかかわりを設定することとなる。

打楽器の音色、リズムとしては、教材曲で特徴的に扱われているウッドブロックとトライアングルの音色とリズムについて聞き深めることが想定される。「はじめ」と「おわり」の部分ではウッドブロックが活躍し、「なか」の部分ではトライアングルが活躍するため、これら二つの楽器の音色を理解することは作品構造の理解にもつながる。リズムという観点からすると、ウッドブロックのリズムが均一ではなくシンコペーションのリズムが加わること、トライアングルのトレモロをとらえる必要がある。加えて、打楽器の音色という意味では、これら以外にも楽曲の最後に登場するカウベル、スライドホイッスルの音色も特徴的であり、子どもたちの興味関心を惹くことが予測されるため合わせて押さえておけるとよいだろう<sup>4</sup>。

曲想といかにかかわるかについては、ウッドブロックが時計の秒針を示し、一定間隔ではないリズムは狂った時計を表現し、トライアングルのトレモロは目覚まし時計のベルの音、最後の打楽器の合奏部分は時計が壊れる様子などが思い浮かべられる。ただし、曲想については各自の感じ方を尊重すべきであるため、どの曲想が絶対であるという認識は持たないことは、前述のとおりである。

本作品は、共通事項に示される「音色」という事項の中でも身近な打楽器に焦点をあてた題材であったため教材研究が比較的行きやすい事例と言えるだろう。「音色」の観点で

4 〈シンコペーテッド・クロック〉は、演奏によって使用される打楽器が一部異なる（例えば、トライアングルが実際の目覚まし時計の音に置き換えられる）場合があるため、音源の選択には注意が必要である。

あっても、木管楽器や金管楽器の音色の聞き分けが必要となる題材の場合には、教師自身が音色の聞き分けを行えるよう教材研究を行うことが必要となる。

## (2) 国語科の場合

ここでは事例として、音楽科と同様に、文部科学省国立教育政策研究所教育課程研究センター『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料【小学校 国語】』の中で紹介されている「事例4」を取り上げる(pp.66-73)。単元の概要は以下の通りである。

○単元名：読んで感じたことや考えたことをまとめよう（ごんぎつね）  
（第4学年）「C読むこと」

○単元の目標（態度に関する部分は割愛）

- (1) 様子や行動，気持ちや性格を表す語句の量を増し，語彙を豊かにすることができる。
- (2) 登場人物の気持ちの変化について，場面の移り変わり結び付けて具体的に想像することができる。
- (3) 文章を読んで理解したことに基づいて，感想や考えをもつことができる。

○単元の評価規準（態度に関する部分は割愛）

【知識・技能】様子や行動，気持ちや性格を表す語句の量を増し，語彙を豊かにしている。  
 【思考・判断・表現】「読むこと」において，登場人物の気持ちの変化について，場面の移り変わり結び付けて具体的に想像している。  
 「読むこと」において，文章を読んで理解したことに基づいて，感想や考えをもっている。

教材：ごんぎつね

単元の目標および評価規準を見ると、下線を引いたように、登場人物の様子や行動、気持ちや性格を表す語句の理解をふまえて、場面の移り変わり結び付けながら登場人物の気持ちの変化を想像し、最終的に自分なりの感想や考えをもつことが目指されていると理解できる。

ここから教材研究の観点として、場面の移り変わり、登場人物、様子や行動・気持ちや性格を表す語句、登場人物の気持ちの変化、以上をふまえた自分なりの感想や考えを設定することとなる。

場面の移り変わりとしては、教材文の記載通りにとらえれば6場面（①「ごんがいたずらばかりする場面」、②「ごんがいたずらを後悔する場面」、③「ごんがつぐないを始める場面」、④「ごんが兵十と加助の後をついていく場面」、⑤「ごんが兵十と加助の話をこっそり聞いている場面」、⑥「ごんが兵十にうたれてしまう場面」）であり、最後の⑥場面がクライマックスとなろう。このクライマックスに向けて、着目する登場人物としては、中心人物である「ごん」、「ごん」を撃ってしまった「兵十」、「兵十」の友人の「加助」、以上の3人が挙がってこよう。

中心人物である「ごん」の変容を捉えるには、様子や行動・気持ちや性格を表す語句に着目し、場面の展開に即してどの言葉を捉えたら良いか絞り込んでいく必要がある。絞り込んだ語句については、辞書も活用し、その言葉が登場人物のどのような様子や気持ちを表すかについて考えておかねばならない。また、「ごん」の変容は「兵十」や「加助」との関わりから生まれるものであることから、両者との関係も押さえた上でとらえていく必要があるだろう。

各場面から着目する語句（抜粋）を取り出せば、次の図表1のようになる。紙面の関係で①、③、⑤、⑥場面のみ挙げる。

【図表1】各場面の着目する語句

場 面	着目する語句
①「ごんがいたずらばかりする場面」	ひとりぼっちの <small>ひ</small> ぎつね／いたずらばかり／ 「ぬすと <small>ぎ</small> つねめ。」
③「ごんがつぐないを始める場面」	「おれと同じ、ひとりぼっちの兵十か。」／う なぎのつぐないに、まず一つ、いいことをした と思いました。
⑤「ごんが兵十と加助の話をこっそり聞いている場面」	「神様にお礼を言うんじゃあ、おれは、 <u>引き合 わ</u> ないなあ。」
⑥「ごんが兵十にうたれてしまう場面」 ※ 視点の転換（ごん→兵十）	<u>あのごんぎつねめが、またいたずらをしに来た</u> な。／「ごん、おまえだったのか。」／ごんは、 <u>ぐ</u> ったりと目をつぶったまま、 <u>う</u> なずきました。 ／火縄じゅうをばたりと、 <u>取</u> り落としました。

自分の「いたずら」を後悔し、同じ「ひとりぼっち」である「兵十」にわかってほしいが故に「つぐない」を続けた「ごん」と、「いたずら」ばかりする「ごん」の「つぐない」に気付かなかった「兵十」、両者の思いが通じ合ったのは「兵十」によって「ごん」が撃たれ、「ぐったりと目をつぶったまま、うなず」いた時であった。この時、「ごん」は何を思ったのか、そして、「兵十」は何を考えたのか。それまでの「ごん」に寄りそった視点から、⑥場面では「兵十」に視点が変わり、「ごん」の内面は描かれていない。クライマックスに向けた全体の流れをふまえて、一人の読者としての読みが求められるのである。表現を根拠に導き出された「感想や考え」であれば、その内容は個人に委ねられて良い部分であることは前述した通りである<sup>5</sup>。

## 6. まとめ

本稿では、音楽科と国語科の教材研究の共通点を考察することで、冒頭で紹介した疑問・不安を解消することを目指してきた。

いかに指導するかが指導法研究であるならば、教師自身が教材そのものへの理解を深め

5 「事例4」では、③場面の「おれと同じ、ひとりぼっちの兵十か」という「ごん」のつぶやきに関する言及は見られないが、教師の行う教材研究としては⑤場面の「引き合わない」とあわせて、おさえておきたいところである。

るのが教材研究だと言える。これに加えて、野口芳宏(2016)は教材以前に作品そのものの理解を目指す素材研究の必要性も提案している。教師の作品理解が深ければ深いほど良いに越したことはないが、全科目を担当する小学校教員が、全ての教科について素材研究まで行うことは時間的に困難が伴うだろう。本稿で示してきたように、まずは授業に直接的に必要な教材研究に絞り、観点を設定して作品理解することが肝要だと考える。もちろんそれは、素材研究が不要だということではない。各教員が自らの核とする教科については素材研究まで深化させ、それを他教科に転移させていくことが有効だと考える。その意味合いにおいても教科間の共通性について考察していくことは重要だろう。本稿では、音による芸術である音楽、文字による芸術である文学作品という二つの芸術を対象にした作品理解の共通性について検討してきたが、おそらく絵画作品やダンス、演劇など他の芸術分野についても共通性を見出すことができるものと考えられる。この点については、今後研究を進めていきたい。

冒頭の「作品をどこまで理解すればよいのか」という疑問に対する一つの答えは、「何をどこまで理解するか」を見極めることである、と言える。題材・単元から焦点を絞り教材研究を行うのか、自らの指導力を上げるために素材研究まで深めるのか。それは、各教員がその時々において見極め選択していく必要がある。教師の多忙感からくる時間不足、教えるべき内容の多さからくる授業時数不足の一端を解消する為にも「作品の何を、どこまで理解するか(させるか)」をその時々で見極めることは必要な視点だといえる。

本稿の知見が現職教員にとって真に有益なものであるかについては、別途、検証を行う必要がある。この点については、現在、本稿の知見を現場に還元する内容で西田、平瀬の二人で講習会を展開中である。講習会の結果を踏まえ、稿を改めて検討したい。

#### 【引用・参考文献一覧】

- 阿部昇(2015)「1『言語活動』そして「アクティブ・ラーニング」をどうとらえたいのか」『国語科の「言語活動」を徹底追究する』p.7. 学文社
- 国立教育政策研究所教育課程研究センター(2020)『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料【小学校 音楽】』東洋館出版社
- 国立教育政策研究所教育課程研究センター(2020)『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料【小学校 国語】』東洋館出版社
- 財団法人音楽鑑賞教育振興会鑑賞指導部会(2008)『音楽鑑賞の指導法「再発見」』財団法人音楽鑑賞教育振興会
- 佐藤明宏(2012)「2教材研究の方法」『小学校・中学校国語科研究授業のすべて』pp.60-64. 東洋館出版社
- 白石範孝ら(2018)『国語科×音楽科の教科横断授業—共通「用語」で汎用的能力を育む』学事出版
- 関向央奈(2017)「国語科と音楽科における合科的・関連的指導の観点：中学校学習指導要領における「鑑賞」「批評」、小学校及び中学校の教科書の関連性に着目して」『国語論集(14)』pp.127-135.
- 関向央奈(2018)「国語科と音楽科における関連的な指導の可能性—「鑑賞」・「批評」・「語彙」から見る指導内容の関連性—」『横浜国大國語教育研究(43)』pp.19-26

- 高須一（2009）「新しい学習指導要領で求められている鑑賞教育とは」『鑑賞の授業づくりのアイデア集』 pp.6-10. 音楽之友社
- 武田博雄（2019）「3場面分け」『小学校国語科「言葉による見方・考え方」を鍛える物語の「読み」の授業と教材研究』 p.18. 明治図書
- 津田正之（2017）「3つの資質・能力を関連付けながら一体的に育むことがポイント」『総合教育技術 2017年7月号』 pp.44-45. 小学館
- 寺田貴雄（2020）「『鑑賞』の意義と留意点」『改訂版 最新 小学校教員養成課程用最新初等科音楽教育法』 pp.93-94. 音楽之友社
- 中地雅之（2020）「教材研究の視点」『改訂版 最新 小学校教員養成課程用最新初等科音楽教育法』 pp.46-47. 音楽之友社
- 野口芳宏（2016）「素材研究・教材研究・指導法研究」『国語教育2016年5月号』 pp.118-121. 明治図書
- 西田治・今道真名（2011）「五感で感じることを起点とした創作活動の実践——小学校における音楽科と国語科の連携」『音楽教育実践ジャーナル vol.8 no2』 pp.116-127.
- 西田治・平瀬正賢・山崎直人・山口亮介（2019）「小学校音楽科と国語科の共通点に関する一考察(1)——「鑑賞」と「読むこと」の指導法に着目して——」『長崎大学教育学部教育実践研究紀要(18)』 pp. 107-119.
- 西田治・平瀬正賢（2021）「小学校音楽科と国語科の共通点に関する一考察(2)——現職教員対象の講習内容開発と実施——」『長崎大学教育学部教育実践研究紀要(20)』 pp. 21-32.
- 二瓶弘行（2021）『二瓶弘行 物語の教材研究』 明治図書
- 山元隆春（2020）「4文学教材研究法」『あたらしい国語科教育学の基礎』 pp.96-97. 溪水社



